

# フロントティアに挑む

●●2

がんは日本人の死因別死亡率1位を占め、さまざまな治療法や薬が研究されている。このがんの新しい治療法を開発し、医療機関と提携して普及を目指すのが、リンパ球バンクだ。

「ANK自己リンパ球免疫療法」と呼ばれる治療法で、リンパ球の持つがん細胞殺傷能力を利用する。リンパ球は血液など体内にある白血球の一種で、そのうちのナチュラルキラー(NK)細胞、ナチュラルキラーT細胞、キラーT細胞などに、がん細胞殺傷能力があることが知られている。



勅使河原 計介社長

《てしがわら・けいすけ》 京大医大学院博士修了。1985年米国ダートマス大免疫学教室研究員、91年京大放射線生物研究センター助手。2003年1月同助教授(准教授)。同年3月退官し4月リンパ球バンク社長。同社京都研究所長を経て、06年12月社長兼所長。55歳。愛知県出身。

【会社概要】

▽本社一東京都千代田区九段南1の5の5 共同ビル九段1号館(☎03・3556・7380)  
▽従業員=29人

## リンパ球バンク

がん細胞殺傷能力が高いとされるNK細胞を使う療法。「患者からNK細胞を取り出し、活性化すると同時に増殖させ、点滴で体内に戻して治療する」と勅使河原計介社長は説明する。

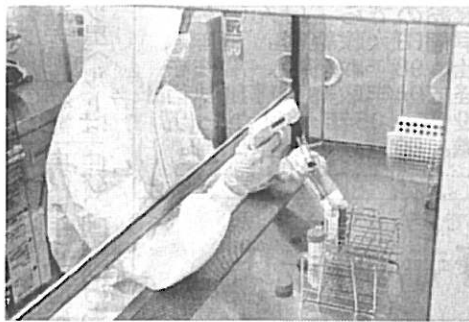
勅使河原社長は同療法の開発者の一人でもあり、とくに「増殖はこれまでもされているが、活性化して増殖することは従来、難しかった」と強調する。これを「ある物質などによって

刺激させ、NK細胞を増強増殖(Amplified)させる」。しかも、NK細胞は、どのようながん細胞にも有効で、増強増殖により一層、殺傷能力が高まるといふ。治療期間はリンパ球を採取して、NK細胞を培養するのに2〜4週間。患者の状態によって異なるが通常、3〜6週間かけて6〜12回、点滴する。患者本

人、難しかった」と強調する。これを「ある物質などによって」ともに、人材、技術面などで施設を京都市に所有し、これを提携している東洞院クリニック(京都市中京区)に提供するとともに、人材、技術面などで施設

いが、入院が不要で副作用も少ないという。今のところ外科、抗がん剤、放射線、抗体医薬品など既存の療法との併用だが、これまでに、この療法で「約640人が治療を受けた」と成果も上がり始めている。

リンパ球バンクは、悪性リン



パ腫にかかった千鳥屋饅頭総本舗(福岡市博多区)の原田光博社長が、同療法によって治癒したことから、原田氏と勅使河原氏が中心になって2001年1月に設立された。原田氏は現在もリンパ球バンクの取締役を務め、勅使河原氏は設立時からテクニカルアドバイザーとして参画。その後、「長年にわたる研究成果を社会に広めたい」と大学を退官し社長に就任した。

株式会社なので、自らは医療行為ができないなどの規制はあるが、勅使河原社長は「今後、提携病院を増やし、培養施設も拡充したい」と成長への青写真を描く。すでに数社のベンチャーキャピタルからの投資を受け、将来の上場も目指している。

## 患者自身の細胞利用で新がん療法

(ジャーナリスト 松浦利幸)  
金曜日に掲載